

初期近代の医学学習指南書

澤井 直

順天堂大学医学部医史学研究室

活版印刷の発明以降、西欧では書籍の生産性・入手性が向上した。著者・出版者にとって書籍を世に出しやすくなったことは好ましく、また読者にとっても容易に書籍を入手できることは喜ばしいことだった。医学書も大量に流通し、種々の医学文献にアクセスすることが可能になった。16世紀初頭には古代ギリシアの文献の原典・ラテン語訳が相次いで出版され、ヒポクラテスとガレノスの大量の著作を読めるようになった。

しかし、学習者にとっては大量の書籍が溢れているという事態は必ずしも好ましいことではなかった。書籍を通じて医学を学ぶ大学の学生などにとって、ヒポクラテスやガレノスの新たな翻訳の存在は、かえって読むべきものが増えて学習を困難にさせる要因にもなりかねなかった。

16世紀には、医学の学習者に身体・病気についての知識や治療方法を教える書籍だけでなく、学習そのものの方法や心得を伝えるという趣旨のタイトルを持つラテン語の書籍が書かれるようになった。16世紀から17世紀初頭の書籍について、書名に基づいて調査したところ、以下の12冊が医学学習指南書として確認できた。

- [1] Martin Stainpeis 『医学における学習と読書のための方法について』(1520)
- [2] Jacobus Sylvius 『ヒポクラテスとガレノスの著作を読む順序とその順序の理由』(1539)
- [3] Jacobus Sylvius 『貧窮学生のための準備が容易で健全な生活法』(1542)
- [4] Janus Cornarius 『医学を理解するための正しい学習について』(1545)
- [5] Johann Placotomus 『特に医学を学ぶための方法についての演説』(1552)
- [6] Honoré du Chastel 『未来の医師に必要なことを論じた演説』(1555)
- [7] Girolamo Mercuriale 『医学に労力を捧げる人たちの学習のための方法について』(1570)
- [8] Johannes Heurnius 『医学に自らの労力を捧げる人々の学びの方法と手段』(1592)
- [9] Antonio Possevino 『医学の学習の方法』(1600)
- [10] Johann G. Schenck 『医学のために教え込まれるべき熱心さについて』(1607)
- [11] Johachim Curtius 『医学に自らの労力を奉じる学習者の方法と手段』(1616)
- [12] Gaspard Bartholin 『医学の学習を始め、継続し、終わらせるようとする人への助言』(1628)

これらの著作はいずれも学習者を助けることが目的とされているが、助言の方向性や内容は多岐にわたる。1) 読書ガイド：どの学習段階でどのような書籍を読むべきか、またどの順序で読むべきかを提示。2) 医学の特質：医学がどのような学問かを説き、何を学習すべきかを、他の分野についても何を学ぶべきかを提示。3) 態度：生活や学習に臨む際のあるべき態度を提示、などの内容が含まれる。

また、医学の学習の前に学習すべきこととして言語学習の段階から始める場合もあれば、医学だけに絞って学ぶべきことを指示する場合もあり、対象とする学習段階も幅がある。

大きな傾向として、16世紀は古代ギリシアやアラビア医学の権威の名が引かれることが多く、17世紀に入ってからは16世紀の医学者の名前も現れるようになる。

上記の著作がリスト内の別の著作に引用・再掲載されることもあり、各著作は独立した著作として書かれたのではなく、一定のジャンルを形成していたことが伺われる。

ヴェサリウスの名が挙がることは少なく、ヴェサリウスの解剖学書が学習書としてではなく研究書として見なされていたことが示唆されるなど、初期近代の医学教育の一側面を表すジャンルとして注目に値する。